

大分の水環境と地域資源

— 内発的発展との関係から —

伊藤達也
Tatsuya ITO

Water Environment and Regional Resources in Oita Prefecture

1. 内発的発展と地域資源

地域経済の発展類型には内発的発展と外発的発展の大きく2つの類型が存在する。わが国の地域経済を考えた時、東京、大阪、名古屋等一部の大都市圏を除けば、地域外部から積極的に資金を投入して発展を目指す外発的発展によって成長を遂げた地域がほとんどである。しかし、外発的発展の場合、地域外部からの資金投入にもっぱら依存するため、地域外の影響が予想以上に大きくなる。従って、多くの地域が内発的発展の要素を取り入れて、地域の自立性確保に努めようとするのは、ある意味、自然な姿である。

内発的発展の意義は地域内の各種資源を積極的に評価する点にあり、さらに自らの住む地域と積極的な関わりを持つようとする地域住民の増加等、地域の精神運動として有効な側面を持つ。しかし、地域の各種資源には大きな制約があることから、内発的発展の選択肢や発展のボリュームにはもともと限りがある。従って、地域の発展を経済的指標のみで測ると、内発的発展の意義がなかなか見えてこないのも事実である。ただ、本来の地域の発展のあり方からすれば、地域に住む者がその豊かさを感じるのは決して経済的指標に限られるものではない。従って、発展の内容をより多様なものさしで測るとともに、その中で地域の自立性や主体性に積極的な評価を与えることができれば、内発的発展の意義や有効性は今少し大きなものとなるであろう。特に将来に向けて既に人口縮小が始まっているわが国において、地域の自立性や主体性に焦点を当てた精神面での地域づくりは、これからますます重要性を増してくると思われる。

では、内発的発展の根拠となる地域内に存在する各種資源にはどのようなものが存在するのか。広義の資源概念から捉えた場合、それは人、自然環境、歴史、文化といった、

地域に存在する有形無形のもの全てとなろう。しかし、資源概念を広義に捉えていく方法では、議論の焦点を絞り込みにくいのが実際である。従って、本稿では地域に存在する土地、水等の地域資源、中でも、「地域資源としての水」に焦点を当てて考えていく。

従来、資源論的把握から水を捉えた場合、それは水道用水、工業用水、農業用水に代表される水資源としての捉え方が一般的であった。しかし、水は厳密な意味で経済財として把握しきれものではない。河川舟運、釣り、水遊び等の河川流水の消費（河川からの水の持ち出し）を伴わない利用、溪谷、滝、湧水等の自然景観に限らず、水辺空間との関連で成立している歴史的町並みや水利用を前提に成り立つ水田等農村景観といった人文景観も、そこに他地域にない貴重性や有用性が見出されることによって、地域資源としての水からの把握が可能である。従って、以下では、大分県を事例にして地域にどのような地域資源としての水が存在しているかを見ていくことにする。

大分県では平松元知事の下、一村一品運動が過去4半世紀にわたって展開されてきた（平松1990、2003、宮本2003、蒲原2004、足立2006）。一村一品運動がユニークなのは、一村一品と称しながらも、それを特定製品の生産奨励にとどめるのではなく、地域おこし、町づくりにつながる概念として広げていった点である。実際、一村一品運動は大分県内においてさまざまな地域おこしの形態をとって広がった。例えば、山国川に焦点を当てて県境という周辺性を逆手にとった地域おこし運動（木ノ下2004、2005）や、長湯温泉のように温泉資源を利用して地域の身の丈にあった町づくりを進める運動（首藤2005）、さらには昭和というレトロではあるが、決して古くはなく、どこにでもあったはずなのに今はなくなりつつある町並み景観に焦点を当てて地域おこしをする豊後高田市（山口2005、産経新聞取材班2006）等の事例が現れている。

平松県政に対しては、その批判も根強く存在することから（地方分権研究会編1999）、本稿ではその評価自体を目的とはせず、上述したように、地域資源としての水の賦存状況を、さまざまな刊行物並びに筆者が行った調査から紹介していくことにしたい。

2. 水の人文景観・自然景観

(1) 人文景観

a) 歴史的町並みと水辺空間

① 歴史的町並み

大分県の水環境は、6本の一級河川が県内を流れていることからわかるように、大変複雑で多様性を有している（図1）。大分県は歴史的には小藩分立の国柄で、藩政期、



図1 大分県の概要

熊本県が2藩（細川・相良）56万石であったのに比べ、53万石で8藩7領と、地形の複雑さや平野の小ささに合わせたような小さな藩がたくさん存在した（平松2006）。もちろん、そうした小藩が必ずしも個々の河川流域内で完結した藩領を有していたわけではない。しかし、そうした自然と歴史が組み合わさって現在の大分県の地域的多様性を生み出したと言うことはできる。

各河川流域や県内地域には、中津、杵築、日出、日田、玖珠（森）、大分（府内）、白杵、佐伯、竹田等の城下町や地域中心地が立地し、それぞれ町の中を流れる河川と合わさって歴史的な水辺空間を作り出してきた。中でも日田や竹田は三重町（現豊後大野市）、山国町（現中津市）と並んで、国土庁（現国土交通省）によって「水の郷100選」に選ばれる等、水辺空間と歴史的町並みの組み合わせが既に観光資源として大きな評価を得ている（国土庁長官官房水資源部1996）。

② 水郷の町・日田

日田は大分県北西部の筑後川流域に位置する山間の町である。上述したように「水の郷100選」に選ばれる等、町の周りを三隈川、花月川等に囲まれ、川との関わりの深い

水郷の町として知られている。

日田の町には豆田町、隈町の2つの中心地がある。豆田町は江戸時代、幕府直轄領として西国郡代が置かれ、九州の政治・経済の中心として栄えた。幕末には広瀬淡窓の開いた私塾・咸宜園に全国から生徒が集まり、教育の中心地として異彩を放った（木藪1990）。現在も歴史的情緒の漂う町並みが残っており、3月の雛祭りを中心に多くの観光客を集めている。

三隈川沿いの温泉街を中心に発達する隈町は、河川舟運や筏流し等、三隈川との関わりの中で発展を遂げてきた（写真1、2）。今は観光地としての様相を呈し、5月末から10月末にかけては鵜飼いが催され、5月20日に鮎漁が解禁されると同時に日田川開き観光祭が実施される。7月20日過ぎには300年の伝統を誇る日田祇園祭が開かれ、観光シーズンはピークを迎える（古賀1993）。こうした川との関わりが、後述する「水量増加運動」と強く関係しており、地域と川との結びつきが川そのもののあり方を規定することを私たちに教えてくれる。



写真1 三隈川沿いの町並み



写真2 三隈川沿いのホテルと釣り人

b) 農村空間の中の水

① 棚田

平野が少ないこともあって、大分県では中山間地域に棚田が広く発達している。その中であって、由布川奥詰地区（由布市、面積4.5ha）、内成棚田地区（別府市、41.7ha）、軸丸北地区（豊後大野市、51.6ha）、山浦早水地区（玖珠町、6.0ha）、両合棚田地区（宇佐市、7.0ha）、羽高棚田地区（中津市、4.9ha）の6地区は、守るべき農村景観として1999年、農水省の認定する「日本の棚田100選」に選ばれた。選定に当たっては、営農状況、維持管理、地域活性化への取り組み等が検討された。

大分県の棚田の特徴として挙げられるのは規模の大きさである。中島（2004）は内成棚田を、「百選の134か所のなかでも5番目の面積であるが、すべてが一望できる範囲に収まっているという点からいけば日本でも1～2を争う規模」であると紹介している。その他の棚田も全体に規模が大きく、軸丸北棚田は面積51.6haと、面積では内成棚田を上回る。各地区はそれぞれ保全会等を設立して棚田の維持管理に努めているが、羽高棚田のように、100選の推薦理由にサンショウウオやエノハ等、清流にしか生息しない

魚の存在等、生態系の保全が掲げられている地区も存在する（ACRES ホームページ）。

② 白水ダム

白水ダムは大分県南西部に位置する竹田市と緒方町（現竹田市）を流れる富士緒井路の用水に使われる農業用堰堤で、総延長15kmの幹線水路を経て緒方町内の田畑を灌漑している（写真3）。堤高は14.1mと、わが国のダム定義（堤高15m以上）からすれば、ダムではないが、通称白水ダムと呼ばれている（堤頂長87.26m、総貯水容量60万 m^3 ）。1933年に建設が始まり、1938年に竣工した。



写真3 白水ダム

白水ダムが「日本一の美しいダム」と呼ばれるようになったのは、都市環境評論家で橋梁の研究者である伊東孝氏が日本一の美堰堤であると折り紙を付けたことに始まる。1999年にその設計思想や水流美が評価されて国の重要文化財に指定されたことにより、河川・ダム関係者を越えて注目されるようになった。そして今では、近代化遺産ガイド、水資源・水環境ガイド（INAX ギャラリー2003、読売新聞文化部・玉木雄介2003、国土交通省九州運輸局、九州産業・生活遺産調査委員会監修／砂田光紀著2005、西日本新聞社編2006）にとどまらず、一般の観光ガイドブックでも紹介されている。

ただ、観光資源としては全くの未開発状態にあり、現地へ行くのには一定の苦勞が必要である。竹田の市街地からの道路案内板はなく、近くの集落入り口から小さい案内板があるのみである。また、集落内の道は細く曲がりくねる生活道路で、運転には細心の注意が求められる。現地に駐車場はあるものの、そこから20分ほど歩いて山を下らなければならない。しかし、それだけの苦勞をしても一見の価値はある施設である。

（2）自然景観

a) 名水

水に関わる自然景観として特徴的なものに、溪流、滝、峡谷、湧水等がある。これらのうち、特に湧水と表流水において優れたものの再発見を第一の目的として、1985年、環境庁（現環境省）が全国で100の名水を選定した（環境庁水質保全局水質規制課監修／（社）日本の水をきれいにする会編1985）。選定の基準は、①水質、水量、周辺環境、親水性の観点から見て状態が良好、②地域住民等による保全活動がある、の2項目を必須条件として、他に、規模、故事来歴、希少性、特異性、著名度等が勘案された。

選ばれた名水を地域別・タイプ別に整理したのが表1である。これを見ると、名水は

表1 名水100選の地域別・タイプ別分布状況

地方	数	湧水	瀑布・河川	地下水	自噴井	用水
北海道	3	3				
東北	12	11	1			
関東	11	8	2			1
中部	23	19	4			
近畿	13	6	2	4		1
中国	11	9	2			
四国	8	6	1		1	
九州・沖縄	19	12	6	1		
全国	100	74	18	5	1	2

資料) 環境庁水質保全局水質規制課監修／(社)日本の水をきれいにする会編(1985)より作成。

中部地方と九州地方に多く分布し、それは100名水のうち74を占める湧水の分布と大きく関係している。九州地方の場合、瀑布・河川から選ばれた数(6)が他地域に比べて多い。

大分県から「名水100選」に選ばれたのは、男池湧水群(由布市)、竹田湧水群(竹田市)、白山川(豊後大野市)の3つである。男池湧水群は阿蘇くじゅう国立公園内にある黒岳の原生林から湧出する湧水で、湧水量は1日2万 m^3 、阿蘇野川となり、大分川へ注いでいる。竹田湧水群はウイスキーの原水にもなる城下町の湧水で、夏には名水河川プールが登場する。市内約60ヶ所から日量7万 m^3 の水量が湧出し、大野川支流の緒方川や玉来川に注いでおり、かつて山頭火が訪れたことでも知られている(佐々木1992、足利・井上1994、『サライ』編集部編2000)。白山川はかつて観光開発によって水質が悪化した苦い経験を有し、地元では350名の会員からなる「白山川を守る会」が、合成洗剤を使わない、生活排水を流さない等の運動を展開している¹⁾(環境庁水質保全局水質規制課監修／(社)日本の水をきれいにする会編1985、講談社カルチャーブックス編集部編1991、上野2005)。

b) 滝

① 大分県の滝

日本には落差5m以上の滝が2,488ヶ所あり、富んだ日本の自然景観をつくりだしている(JTBホームページ)。滝にはそれぞれ特徴があり、これを地域資源の観点からランク付けすることは容易でない。ただ、環境庁(現環境省)と林野庁(現農水省)の後援の下、1990年に「日本の滝選考会」が選定した「日本の滝100選」は、数ある滝の中から代表的な滝を選び出す際の1つの目安にはなるであろう。

表2 日本の滝100選の都道府県別分布状況

	日本の滝100選	200選	続200選		日本の滝100選	200選	続200選
北海道	6	12	18	滋賀	1	2	4
青森	2	5	3	京都	1	6	2
岩手	1	4	10	大阪	1	6	2
宮城	2	2	7	兵庫	4	8	8
秋田	4	6	10	奈良	4	6	3
山形	3	3		和歌山	3	6	3
福島	3	4	6	鳥取	2	5	6
茨城	1	3	1	島根	2	3	3
栃木	2	7	2	岡山	1	2	6
群馬	3	4	3	広島	1	3	7
埼玉	1	3	1	山口	1	1	6
千葉	0	3	1	徳島	3	4	5
東京	1	1	2	香川	0	2	1
神奈川	2	3	2	愛媛	2	2	4
新潟	3	5	3	高知	3	4	2
長野	3	7	6	福岡	0	6	2
山梨	3	2	6	佐賀	2	3	3
富山	1	4	3	長崎	0	3	3
石川	1	3	3	熊本	4	6	4
福井	1	4	2	大分	4	7	4
岐阜	4	6	7	宮崎	4	4	4
静岡	3	4	9	鹿児島	2	7	3
愛知	1	2	2	沖縄	1	3	2
三重	3	4	6	全国	100	200	200

注) 日本の滝100選は旧環境庁と旧林野庁の後援の下、日本の滝選考会において選ばれたもの。200選は中西栄一(1998)『日本の滝200選』に掲載されているもの。続200選は中西栄一(2000)『続・日本の滝200選』に掲載されているもの。

資料) 中西(1998、2000)。

表2は「日本の滝100選」に選ばれた滝の都道府県別分布状況を示したものである。「日本の滝100選」以外の滝の状況を知るために、中西栄一著『日本の滝200選』『続・日本の滝200選』に掲載されている滝の都道府県別数も参考に掲載した。これを見ると、日本を代表する滝が集中している都道府県として北海道、兵庫県、大分県を、それに続く集中県として秋田県、長野県、岐阜県、奈良県、熊本県を上げることができる。大分県はわが国において最も代表的な滝の集中県であると言えよう。

大分県から「日本の滝100選」に選ばれた滝は、東椎屋の滝(宇佐市、落差85m)、西椎屋の滝(玖珠町、83m)、振動の滝(九重町、83m)、原尻の滝(豊後大野市、20m)の4

滝である。筆者はこのうち東椎屋の滝を除く3つの滝と、慈恩の滝（日田市、玖珠町、30m）、三日月の滝（玖珠町、10m）等を訪れた。大分県にはこの他にも素晴らしい滝が数多くある。『日本の滝200選』には、「日本の滝100選」に選ばれた4滝の他に、竜門の滝（九重町、20m）、慈恩の滝、白水の滝（竹田市、38m）が、『続・日本の滝200選』には、曉嵐の滝（佐伯市、15m）、福貴野の滝（宇佐市、65m）、権現滝（日田市、15m）、桜滝（日田市、20m）が紹介されている。以下では、筆者が訪れた原尻の滝、西椎屋の滝、振動の滝を紹介する。

② 原尻の滝

原尻の滝は大野川支流にあり、一見、ごく普通の平野を流れる川が、突然、高さ20m（幅120m）落下してできている（写真4）。滝の上流には、川の両側に水田が広がっており、日本人にはなかなかなじみのない景観と言えよう。阿蘇溶岩の節理をU字形にえぐり、水量豊富に流れ落ちる様は、「大分のナイアガラ」または「九州のナイアガラ」と呼ぶにふさわしく、そのダイナミックな流れは見る者を魅了する（中西1998）。『日本の滝2－西日本767滝－』によれば、滝の幅120mは国内3位、滝つぼの広さ3,900㎡は国内2位に当たる。1990年に「日本の滝100選」に選ばれ、当地域のシンボルとなっている。滝のそばに道の駅「原尻の滝」があり、比較的観光地化が進んでいるものの、滝の持つ観光資源としての潜在的な大きさからすれば、さらなる発展の可能性を有していると思われる。



写真4 原尻の滝

③ 西椎屋の滝

西椎屋の滝は奥耶馬溪一帯の水を集め、断崖絶壁に豪快に波打って落下する西日本一の名瀑と言われている（写真5）。駐車場から約100mのところ展覧台があり、滝の上部と滝の直上部に位置する日出生ダムを見ることができる。この展覧台から見る西椎屋の滝は、あたかも日出生ダムの放水口のように見え、景観的には評価が分かれるであろう。筆者には、滝の背景に位置するダムが必ずしも好ましいものには見えなかった。

ここからさらに約400mの急峻な階段を下ると、滝つぼ展覧台に到着する。こちらの展覧台からは滝の全景を見ることができ、絶景である。東椎屋の滝とともに宇佐の2大瀑布に数えられている²⁾（北中2006）。ただ、階段の急峻さは滝つぼ展覧台へのアクセスを困難にしており、階段は晴



写真5 西椎屋の滝

天時にも拘らず濡れており、滑りやすく危険であった。道路案内板は設置されていたが、観光地化はほとんどされていない。

④ 振動の滝

振動の滝は九重連山に源を発し、鳴子川溪谷の一番奥に存在する。雄滝、雌滝、子滝の3つの滝があり、雄滝は落差83mを豪快に流れ落ちている（写真6）（中西1998）。北中（2006）は「多くの滝を有する大分県でも、1、2を争うほどの大瀑であり、九州屈指の名瀑とっていいだろう」と述べている。



写真6 振動の滝

筆者はこの滝を「九重夢大吊橋」から見た。この吊橋は日本一長い歩行者専用吊橋（長さ390m、高さ173m、幅1.5m）で、2006年10月30日に完成して以来、くじゅう地域を代表する観光スポットになっている。振動の滝は吊橋の中央あたりからよく見え、筆者同様、足を止めて滝を撮影する観光客が数多く存在した。

（3）温泉

a) 大分県の温泉

温泉の存在も大分県の水環境を語る場合、忘れてはならないものである。しかし、改めて「地域資源としての水」として焦点を当てる必要もなく、既に確固たる観光資源と

表3 温泉の番付

東横綱	草津温泉（群馬） 乳頭温泉（秋田）	西横綱	由布院温泉（大分） 黒川温泉（熊本）
東大関	野沢温泉（長野） 登別温泉（北海道）	西大関	別府温泉（大分） 奥飛騨温泉郷（岐阜）
東関脇	銀山温泉（山形） 法師温泉（群馬）	西関脇	長湯温泉（大分） 新川溪谷温泉郷（鹿児島）
東小结	鳴子温泉郷（宮城） 四万温泉（群馬）	西小结	大牧温泉（富山） 湯原温泉郷（岡山）
前頭	湯平温泉、筋湯温泉、壁湯温泉、川底温泉（大分県分だけ表示）		

資料）松田（2003）より作成。

しての地位を占めている。従って、ここでは簡単に触れるにとどめたい。

大分県の温泉はその湯量において日本一を誇る。また、温泉専門家をうならせる名湯が多く存在し、松田（2003）によれば、全国の数ある温泉の中で、由布院温泉が西横綱、別府温泉が西大関、長湯温泉が西関脇に位置づけられ、それ以外にも前頭に湯平温泉、筋湯温泉、壁湯温泉、川底温泉が掲載されている³⁾（表3）。まさに日本一の温泉県である。

大分県の温泉を代表するのは、松田の番付でも西横綱、西大関に位置づけられている由布院温泉、別府温泉である。また、西関脇の長湯温泉も近年、ユニークな地域おこしで注目されている。以下では筆者が訪れた由布院温泉、長湯温泉について見ていく。

b) 由布院温泉

由布院温泉の発展物語はこれまでも多くの研究者、また実際にそれを担った人たちによって紹介されてきた（中谷2006、光本2006）。由布岳の南西麓に開けた湯布院町（現由布市）にあって、標高が450mから500mあるため、夏は涼しく、多くの作家や有名人が避暑や保養に訪れた。民家にまじって点在する旅館は、モダンなものから湯治客向けの素朴なものまでさまざま、温泉地と言うよりも別荘地の趣で



写真7 金鱗湖

ある（講談社編1991）。年間400万人近くの入り込み客数を数え、特に女性から圧倒的に支持され、草津温泉と並び、人気温泉ランキングで絶えずトップランクに位置づけられている。

今回、わずかな滞在と聞き取りであったが、そうした発展物語のあとをたどることができ、由布院が現在抱える問題も垣間見ることができた。それをあえて水環境の視点から捉えれば、温泉という存在そのものが水環境の最も代表的な構成要素であるという点の改めでの確認、さらには町を縫うように流れる小河川、金鱗湖等の水辺空間の評価（写真7）、につながってくる。本稿では十分な検討をするには至っておらず、今後の課題としたい。

c) 長湯温泉

直入町（現竹田市）にある長湯温泉は、各施設とも基本的に源泉かけ流しを行っており、源泉中の炭酸成分が浴槽までほとんど抜けないことから、入浴時に体中に大量の泡が付着する。1988年に花王が「日本一の炭酸泉」と命名し、それが全国に広まった。温

泉街には代表的施設である町営御前湯（写真8）、長湯温泉の象徴であるガニ湯（写真9）の他に、近年、長湯温泉を代表する大丸旅館が、外湯「ラムネ温泉」を開業し、気楽に日本一の炭酸泉を楽しめるようになった。



写真8 御前湯

3. 河川

(1) 大分県の河川

大分県には大分川、大野川、筑後川、山国川、番匠川、五ヶ瀬川の計6本の一級河川が流れている⁴⁾（図1、表4）。このうち大分川、大野川、番匠川は流域の全て、またはそのほとんどが大分県内に属する、いわゆる「県内河川」であるのに対して、筑後



写真9 ガニ湯

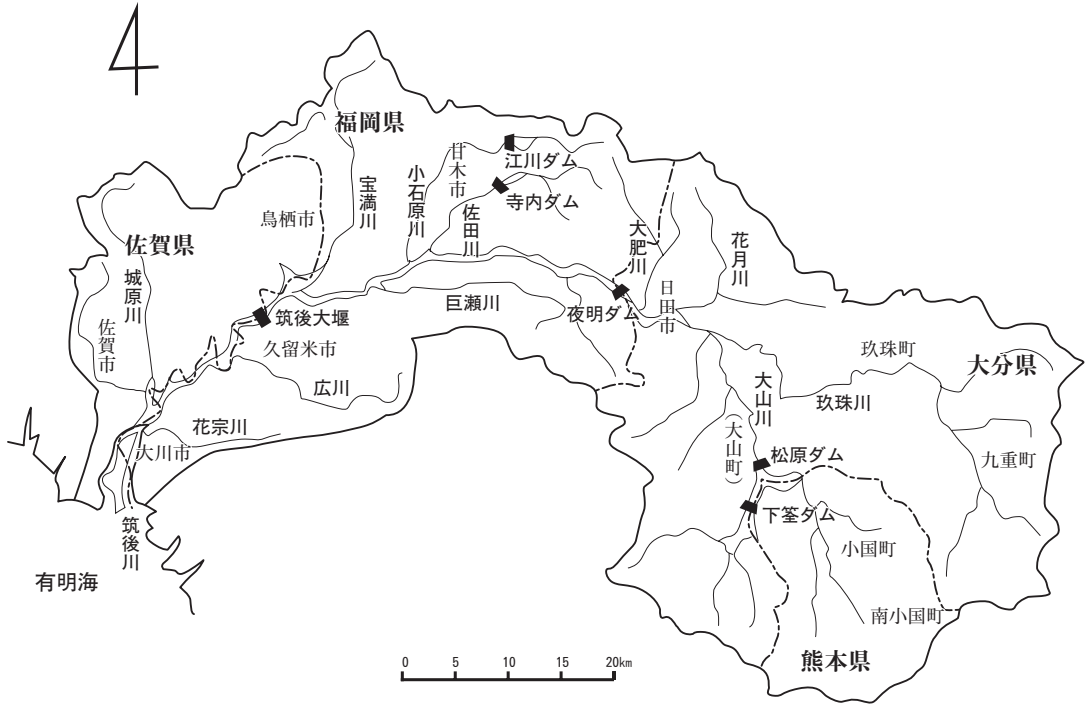
川、山国川、五ヶ瀬川は大分県と大分県以外の県も流れる、いわゆる「県際河川」である。従って、河川との関わりから大分県内の各地域を見ていく場合、県内河川、県際河

表4 大分県内を流れる一級河川

	幹川 流路 延長 (km)	流域 面積 (km ²)	基本高水 流量 (m ³ /sec)	基準 地点	年間総 流量* (億m ³)	観測 所名	関係県
山国川	56	540	4,800	下唐原	6.2 4.6	下唐原	大分・福岡
筑後川	143	2,863	10,000	荒瀬	31.4 24.7	瀬の下	大分・福岡 佐賀・熊本
大分川	55	650	5,700	府内大橋	4.7 5.5	明礮橋	大分
大野川	107	1,465	11,000	白滝橋	16.1 17.3	犬飼	大分・宮崎 ・熊本
番匠川	38	464	3,600	番匠橋	2.1 3.1	番匠橋	大分
五ヶ瀬川	106	1,820	7,200	三輪	15.6 18.5	三輪	大分・宮崎 ・熊本

注) * 年間総流量は上段が1998年、下段が2002年の値。

資料) 日本河川協会監修/国土開発調査会編(1998、2006)より作成。



資料) 建設省九州地方建設局監修 (1979) より修正引用。

図2 筑後川流域図

川が持つ特徴をどのように評価していくかが重要なポイントとなってくる⁵⁾。

例えば、大分川、大野川、番匠川等の県内河川の場合、河川に関わる取り組みの実施や流域内ネットワークの構築において、行政レベルの調整の困難さは少ないと思われる。それに対して、県際河川の筑後川、山国川等では、流域内で文化や歴史の多くを共有する一方、流域を複数県で分かつことによって、これまで地域形成を目指す動きが必ずしも十分でなかった。近年、県際河川流域で県境を越えて歴史の再評価、地域評価が行われているのは、これまで分断されてきた地域の再統合へ向けての試みを住民自らが認識し、開始したからに他ならない(中津下毛地域づくりネットワーク推進協議会・豊前の国建設倶楽部1999、日田市民セミナー「紫明庵」2000、樋口明彦+川からのまちづくり研究会2003、木ノ下2004、2005)。以下では筑後川流域で発生した出来事に焦点を当てて述べていく。

(2) 筑後川

a) 4つの県を流れる大河

筑後川は下流に福岡県、佐賀県が位置し、大分県は熊本県とともに上流に位置する(図2)。従って、歴史的にはダム開発を中心とした水源地域の役割を担い、その中で河

川開発史における1つのエポックとなった松原・下笠ダム問題、通称「蜂の巣城事件」が発生した。蜂の巣城事件は地域からすれば負の遺産であろうが、そのインパクトの大きさは他地域の同種問題を圧倒しており、見方を変えれば、非常にインパクトの大きな正の地域資源としての可能性を有している。

一方、筑後川上流地域の中心である日田市は、既述したように筑後川の有する歴史、文化を町の人文景観として体現しており、人と川との関係をより前面に出した地域づくりを行ってきた。日田地域を中心に展開されてきた「水量増加運動」は、こうした筑後川の開発の歴史、日田市と筑後川との関係を抜きに語ることはできない。

b) 蜂の巣城事件

1953年6月26日に筑後川で発生した大水害をきっかけに、建設省（現国土交通省）は筑後川治水計画の要として大山川上流に松原・下笠ダムを計画した。1956年、建設省は計画測量のためにダム建設地点の立木伐採をするが、その際の役人の横暴な態度に住民側は態度を硬化させ、その後、20年近くに及ぶダム建設反対運動が開始される。反対運動の中心人物は室原知幸氏で、反対運動の要として下笠ダム建設予定地右岸に砦「蜂の巣城」を建設した（写真10）。

その後、室原氏はダム事業認定の無効を求める行政訴訟をきっかけに、数多くのダム反対訴訟をしかけていく。「公共事業は、法にかない、理にかない、情にかなってこそ、その意義が認められるものとなる」という基本的主張を柱に、「法には法」、また時には「暴には暴」を使い分け、壮絶な闘いを繰り広げていった。途中、室原氏が九州地方建設局（現九州地方整備局）の代執行時に発生した乱闘事件「下笠水中合戦」を指揮したとして公務執行妨害で逮捕される等、象徴的な事件が何度も発生するが、行政訴訟に敗れ、反対派は分裂し、絶対反対を掲げていた小国町が条件付賛成に回ること等によって、室原氏は孤立無援となり、1964年6月に蜂の巣城は陥落、翌65年、ダム本体建設工事が開始され、1973年に松原・下笠ダムは完成した（写真11）。室原氏はダムの完成を見ることなく、1970年に死去した。

今回の調査で筆者が最も関心を持っていたのが、



蜂の巣城の砦。ダム建設に反対する人々は川を渡る小橋を建てて監視した。手前は建設局の重機が下笠ダム建設現場の作業員を監視する様子。昭和29年5月撮影。写真新聞社提供。

資料) 週刊にっぽん川紀行
(2004)『筑後川』学習研究社。

写真10 蜂の巣城の攻防



写真11 下笠ダム

この蜂の巣城跡であった。もちろん、下笠ダムが完成して30年以上が過ぎ、現在、何が残されているというわけではない。しかし、戦後、わが国においてすさまじい勢いで進められたダム建設が全国各地で水没住民の悲劇を生み、第一次オイルショック後においては、建設目的そのものが問われる問題へと広がっていったことを考えると、ダムや河口堰の建設を考えるための原点がここ蜂の巣城にあるのである。

蜂の巣城事件については、室原自身の著作（室原1960）をはじめ、佐木（1976）、松下（1982）等の小説が、また、下笠・松原ダム問題研究会編（1972）、関西大学下笠・松原ダム総合学術調査団編（1983）等の総合的な研究報告が既に公表されている。しかし、ダムの目的妥当性をめぐって今も全国各地で続く反対運動を考えた時、私たちは蜂の巣城事件を通じて室原氏が問い続けた問題に対して、果してこれまでどれだけ答え、かつ人と川のあるべき姿を示すことができたのだろうか、と改めて自らに問いかけざるを得ない気持ちになる。

そうした点を考えると、ダム・河口堰問題の原点とも呼ぶべき場所に蜂の巣城事件の概要を示すものがほとんどない⁶⁾というのは、大変残念なことであった。蜂の巣城事件が発生した、まさにその場所に、蜂の巣城事件の問いかけに真摯に応える施設整備がされてよい気がしてならない。

c) 日田市・大山町の水量増加運動

筑後川上流は水力発電適地であり、古くから水力発電が行われてきた。蜂の巣城事件の対象となった松原ダム、下笠ダムも目的の1つに水力発電を掲げている。しかし、水力発電の進展に伴い、筑後川からは水がなくなり、河川環境に深刻な影響がでるようになった。

1922年、九州電力（旧）は大山町（現日田市）との間で、大山川河川流量の2/3を取水する契約を結び、1952年には同じく大山町との間で大山川河川流量全量の取水契約を結んだ（成毛1999、田淵2006）。そして1969年下笠発電所、1971年松原発電所、1973年柳又発電所（三隈川の日田市街地と夜明ダムの中間地点）が完成し、大山川、筑後川から流水が消える、または大幅に減少する事態が発生した。

こうした事態に対して大山町民並びに日田市民の間から、河川環境の破壊状況が指摘されるようになり、河川流量の増量要求が出されるようになった。彼らの増量要求の根拠は、大山町ではかつて大山川に生息した響鮎の復活であり、日田市においては、花火大会、屋形船、鵜飼い等観光の舞台である三隈川の水辺空間の回復を求めてであった。

地域住民の粘り強い要求によって、1983年、松原ダムから0.5 m^3/s 、大山川堰堤から1.5 m^3/s の河川維持用水の放流が実現した。しかし、地元住民等はさらなる流量増強を

要求し、様々なイベントを繰り広げながら運動を拡大し、やがて行政を巻き込んだ運動へと転換することに成功する。

1998年5月、日田市は自治会連合会、商工会議所等と「三隈川の水量増加実行委員会」(83団体)を結成、同年7月には大山町が「大山川水量増加実行委員会」を結成し、公式に河川維持用水の増量を建設省や九州電力に求めていく。そして同年9月には、日田市で「三隈川の水量増加を求める市民総決起集会」(参加者約1,400名)が開催された。その後、九州電力との交渉を経て、最終的に大山川堰堤から $4.5\text{m}^3/\text{s}$ (4月~10月)、 $1.8\text{m}^3/\text{s}$ (11月~3月)の維持用水が増量されることになる(写真12)。全国各地でダムから河川流量を取り戻す運動が行われているが、日田地域の「水量増加運動」は運動の中身、取り戻した河川流量のボリューム等において、画期的なものと言えよう。



写真12 大山川

d) そして、夜明ダム

こうした「水量増加運動」の活力はその他の問題に対して様々な波及効果をもたらしている。水量増加運動を契機に日田市は「環境保全都市／日田の川づくり」を宣言し、大山町は「大山川再生計画」に取り組むこととなった。また、新聞に「筑後川水系ダム群連携構想」という新たな水資源開発計画が報道されると、日田市議会はただちに反対意見書を議決し、玖珠川上流の猪牟田ダム計画に対しては日田市長が建設反対を表明し、猪牟田ダム計画を中止に追い込んだ。

市民グループは今回の河川水量増加の成果に満足せず、2010年を目標にさらなる水量増加を求めている。また筑後川上流域の河川環境再生を視野に入れた運動を開始し、2004年には台霧の瀬プロジェクトを実施した。さらに河川を見つめる目は筑後川流域全体へ向けられ、筑後川下流で活動する市民グループとの連携が図られていく。

そうした中で流域再生の1つの象徴となっているのが、筑後川を分断する夜明ダムの改修を求める運動である。夜明ダムは福岡・大分県境の筑後川夜明



写真13 夜明ダム



写真14 夜明ダム下流

溪谷に1954年に建設された発電ダムである（写真13、14）。市民グループは、夜明ダムが堰程度の役割しか果していないのにも拘らず、筑後川の河川機能を分断する最大の障害となっていることを問題視し、舟運（筏を含む）が可能となり、有明海からの天然鮎が遡上可能となるダム改修を訴えている（日田市民セミナー「紫明庵」2000）。

現在、全国的に問題となっているダム・河口堰による環境破壊の問題、さらには地域文化の破壊問題を考えた時、筑後川流域で取り組まれている運動は最も先端を行くものである。こうした運動が地域ぐるみで行われる素地は本稿で見てきた「地域資源としての水」をまさに地域住民が自らのものとして真剣に考えてきた姿勢に求めることができよう。そして、運動が現実の成果を上げることによって、「地域資源としての水」はより一層、魅力的なもの、価値のあるものへと変わっていくと思われる。

4. おわりに

以上、大変簡単ではあるが、大分県に存在する「地域資源としての水」の賦存状況を見てきた。本稿で行った「地域資源としての水」把握の試みは、調査期間、手法を含め、検討の余地の大きいことを自覚しており、今後、地域に存在する水を多面的に捉えていく手法、地域資源として評価する方法についてのさらなる検討を行っていくことが必要であると考えている。

注

- 1) これら以外にも、例えば『九州の名水百泉』では、御前岳湧水（日田市）、かくし水（由布市）、白水鉾泉ラムネ水（由布市）、法華院温泉の湧水（竹田市）、水の口湧水（杵築市）、清水寺の霊水（杵築市）、宮川滝の口（由布市）、志高湖の瀧神水（別府市）、萬太郎清水（別府市）、老野湧水（竹田市）等が大分県を代表する名水として紹介されている。また『大分の名水50選』には「豊の国名水15選」が紹介されており、既掲した男池湧水群、竹田湧水群、御前岳湧水、水の口湧水、清水寺の霊水、宮川滝の口、老野湧水の他に、清水瀑園（玖珠町）、白水の滝（竹田市）、神の井（佐伯市）、蓮光寺湧水（佐伯市）が選ばれている。合計が15にならないのは、竹田湧水群が5つに分けて選ばれていることによる。
- 2) 福貴野の滝を合わせて宇佐の三瀑布と呼ぶこともある（藤内2003）。
- 3) 『日本の名湯・西日本』では、別府温泉は別府八湯として、単独で扱われており、それ以外に、九州の名湯（10湯）として天ヶ瀬温泉、由布院温泉が紹介されている。大分県の温泉の歴史、現況については、朝日新聞大分支局編（1990）、永尾（1993）、池田（2003）、井上（2003）、斉藤（2005）、平野（2006）等を参照。

- 4) 大分県内の個別河川流域の歴史文化遺産については既に詳細な報告書が作成されている（大分大学教育学部1977、1986、1989、1992）。
- 5) 大分県の主要都市は必ずしも一級河川流域に位置するものばかりではない。大分市（大分川、大野川）、中津市（山国川）、日田市（筑後川）、佐伯市（番匠川）、竹田市（大野川）、由布市（大分川）、豊後大野市（大野川）はそれぞれ一級河川流域にほぼ属するものの、別府市、杵築市、国東市、宇佐市、豊後高田市、臼杵市、津久見市は一級河川流域にない。従って、大分県内の都市と河川流域の関係は地域により密着した小河川流域まで視野に入れた検討を行っていく必要がある。
- 6) 現地には国土交通省が建設した「しもうけ館」「まつばら館」という施設があり、松原・下笠ダム関連の写真パネルや筑後川の治水・利水に関わるパネルが展示されていた。しかし、これらの施設は土日みの開館であり、時間的なアクセスに難点がある。また、施設の展示物は事件の大きさ、社会的影響からすれば、明らかに貧弱である。

参考文献

- 朝日新聞大分支局編（1990）『おおいた温泉風土記－エリア別温泉探訪記－』葦書房、142p
- 足利武三・井上 優（1994）『九州の名水百泉』西日本新聞社、196p
- 足立文彦（2006）「一村一品運動と地域経済の自立」商工金融 8、pp.1～17
- 池田利勝（2003）「大分の秘湯・名湯を楽しむ」pp.205～220（辻野功・日本文理大学「大分学」講座編『大分学・大分楽』明石書店、223p）
- INAX ギャラリー（2003）『水辺の土木』INAX 出版、71p
- 井上信幸（2003）「油屋熊ハ－世界の別府温泉にした男－」pp.79～98（辻野功・日本文理大学「大分学」講座編『大分学・大分楽』明石書店、223p）
- 上野卓男（2005）「白山川の思い出」pp.21～28（NPO 法人河童倶楽部『大野川から 創刊1号』河童舎、79p）
- 大分大学教育学部（1977）『大野川－自然・社会・教育－』515p
- 大分大学教育学部（1986）『大分川－自然・社会・教育－』451p
- 大分大学教育学部（1989）『山国川－自然・社会・教育－』490p
- 大分大学教育学部（1992）『日田・玖珠地域－自然・社会・教育－』520p
- 環境庁水質保全局水質規制課監修／（社）日本の水をきれいにする会編（1985）『名水百選－100『名水』公式ガイドブック』ぎょうせい、127p
- 関西大学下笠・松原ダム総合学術調査団編（1983）『公共事業と人間の尊重－下笠・松原ダム建設と蜂の巣城紛争を中心として－』ぎょうせい、690p
- 蒲原由和（2004）『グローバル知事平松守彦その発想と実践－大分から九州、アジア、世界へ－』

- 西日本新聞社、269p
- 北中康文（2006）『日本の滝2－西日本767滝－』山と溪谷社、495p
- 木ノ下勝矢（2004）「県境を越えた山国川での地域づくり」pp.148～159（石川治江・大野重男・小松寛治・吉川勝秀編／川での福祉・医療と教育研究会著『川で実践する福祉・医療・教育』学芸出版社、191p）
- 木ノ下勝矢（2005）「県境・山国川流域の連携と参加」水資源・環境研究17、pp.109～113
- 講談社カルチャーブックス編集部編（1991）『日本列島百名水』講談社、143p
- 講談社編（1991）『日本の名湯・西日本－温泉の歴史と文化とエコロジー－』講談社、143p
- 古賀英毅（1993）『華競への街－日田・隈町物語－』西日本新聞社、167p
- 国土交通省九州運輸局、九州産業・生活遺産調査委員会監修／砂田光紀著（2005）『九州遺産－近現代遺産編101－』弦書房、271p
- 国土庁長官官房水資源部（1996）『水と緑の文化をはぐくむ水の郷百選』国土庁長官官房水資源部、227p
- 木藪正道（1990）『日田の歴史を歩く』芸文堂、215p
- 斉藤雅樹（2005）「舌で味わい目で愉しむ大分の温泉」pp.100～116（辻野功・日本文理大学「大分学」講座編『大分学・大分楽Ⅱ－地域の自立・自尊－』明石書店、275p）
- 佐々木健（1992）『名水紀行－山頭火と旅するおいしい水物語－』春陽堂、135p
- 佐木隆三（1976）『大将とわたし（新装版）』講談社、216p
- 『サライ』編集部編（2000）『山頭火と歩く名水』小学館、127p
- 産経新聞取材班（2006）『地域よ、蘇れ！－再生最前線の試み－』産経新聞出版、195p
- 下笠・松原ダム問題研究会編（1972）『公共事業と基本的人権－蜂の巣城紛争を中心として－』帝国地方行政学会、956p
- 首藤勝次（2005）「寒村の奇跡－長湯温泉の挑戦－」pp.210～218（辻野功・日本文理大学「大分学」講座編『大分学・大分楽Ⅱ－地域の自立・自尊－』明石書店、275p）
- 田淵直樹（2006）「日田水量増加運動の政治過程－ひた水環境ネットワーク運動を中心に－」水資源・環境研究18、pp.43～48
- 地方分権研究会編（1999）『平松・大分県政の検証』緑風出版、225p
- 中島峰広（2004）『棚田百選を歩く』古今書院、228p
- 中津下毛地域づくりネットワーク推進協議会・豊前の国建設倶楽部（1999）『山国川－新たなる流域連携に向けて－』253p
- 中西栄一（1998）『日本の滝200選』東方出版、150p
- 中西栄一（2000）『続・日本の滝200選』東方出版、150p
- 中谷健太郎（2006）『新版 たすきがけの湯布院』ふきのとう書房、223p

- 永尾和夫（1993）『別府歴史散歩 泉都有情』西日本新聞社、185p
- 成毛克美（1999）「日田、大山の『水量増加』住民運動と筑後川の再生」水資源・環境研究12、pp.59～62
- 西日本新聞社編（2006）『九州水物語—名水・湧水・親水ガイド—』西日本新聞社、151p
- 日本河川協会監修／国土開発調査会編（1998）『河川便覧 1998』国土開発調査会、425p
- 日本河川協会監修／国土開発調査会編（2006）『河川便覧 2006』国土開発調査会、452p
- 樋口明彦＋川からのまちづくり研究会（2003）『川づくりをまちづくりに』学芸出版社、207p
- 日田市民セミナー「紫明庵」（2000）『筑後川 筑後川水環境マップ 第4号』240p
- 平野芳弘（2006）「別府八湯を楽しむ」pp.104～123（辻野功・日本文理大学「大分学」講座編『大分学・大分楽Ⅲ—地域再生—』明石書店、279p）
- 平松守彦（1990）『地方からの発想』岩波新書、229p
- 平松守彦（2003）「世界に広がる一村一品運動」pp.41～64（辻野功・日本文理大学「大分学」講座編『大分学・大分楽』明石書店、223p）
- 平松守彦（2006）「序文 21世紀の『地域学』」pp.7～9（辻野功・日本文理大学「大分学」講座編『大分学・大分楽Ⅲ—地域再生—』明石書店、279p）
- 藤内 隆（2003）『大分の名水50選』おおいたインフォメーションハウス、127p
- 松下竜一（1982）『砦に拠る』講談社文庫、400p
- 松田忠徳（2003）『おとなの温泉旅行術—本物の見分け方・入り方—』PHP 新書、217p
- 光本伸江（2006）「まちづくりの資源と討議過程」pp.103～134（出水薫・金丸裕志・八谷まち子・椛島洋美編『先進社会の政治学』法律文化社、245p）
- 宮本吉次郎（2003）「一村一品運動」pp.27～40（辻野功・日本文理大学「大分学」講座編『大分学・大分楽』明石書店、223p）
- 室原知幸（1960）『下笠ダム—蜂之巣城騒動日記—』学風社、178p
- 山口泰久（2005）「『昭和の町』に人と光を観る」pp.219～238（辻野功・日本文理大学「大分学」講座編『大分学・大分楽Ⅱ—地域の自立・自尊—』明石書店、275p）
- 読売新聞文化部・玉木雄介（2003）『近代化遺産ろまん紀行—西日本編—』中央公論新社、363p
- ACRES ホームページ『日本の棚田百選』
[\(http://www.acres.or.jp/Acres20030602/tanada/\)](http://www.acres.or.jp/Acres20030602/tanada/) 検索日2007年5月1日
- JTB ホームページ『日本の滝百選』
[\(http://www.jtb.co.jp/kokunai/theme/100sen/taki/\)](http://www.jtb.co.jp/kokunai/theme/100sen/taki/) 検索日2007年5月1日